

交流を主軸とした海外短期研修での学びを考察する — 気づき・発見・驚き・疑問と新たな探求 —

稲葉みどり

愛知教育大学日本語教育講座

Exploring What the Students Learned in Overseas' Short Visit Program

Midori INABA

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

本稿では、春休みを利用したタイへの10日間の海外短期研修プログラムの成果を探る。このプログラムは、前半5日間の探求を主軸としたバンコクでの社会見学研修と異文化体験、後半5日間のチェンライの学術交流協定校での学生と交流を主軸とした研修で構成されている。前半の研修については、稲葉(2016)でプログラムの成果等を考察したので、ここでは、後半の部分で研修生がどのようなことを学んだかを研修記録や省察レポートの記述を基に考察した。その結果、研修を通じて研修生は、1) 現地の学生等と多くのコミュニケーションの機会を得たこと、2) 最初は不安、戸惑いを感じながらも交流の輪に溶け込んで親睦を深め、感動や喜びを得たこと、3) 異文化体験を通じて、様々な発見や驚き等があったこと、4) 課題の探求を通じて、文化や習慣に関して様々な知識や情報を得たこと、5) 日本や日本語等を積極的に紹介するような発信ができたこと、6) 研修を振り返り、達成できなかった課題の理由を考え、準備不足だった点を反省し、今後の研修に対する新たな姿勢を打ち出すことができたこと等が示唆された。よって、研修は一定の成果があったと考えられる。しかし、この1回だけの研修でできる体験等は限られており、学びを構築していくためには、さらに研修の機会を設けていく必要である。

Keywords : 海外短期研修, 交流型, 異文化体験, 日本語教育, 探求

I 研究の目的

学生を海外の大学等に派遣して、異文化体験、語学研修、社会見学、現地の学生や地域との交流等を行う海外短期研修は、近年多くの教育機関で実施されている。本稿では、春休みを利用したタイへの10日間の海外短期研修プログラムの教育的効果を探る。このプログラムは、前半5日間の探求を主軸としたバンコクでの社会見学研修と異文化体験、後半5日間のチェンライの学術交流協定校での学生と交流を主軸とした研修で構成されている。前半の研修については、稲葉(2016)でプログラムの成果等を考察したので、ここでは、後半の部分を取り扱う。

海外研修は、社会見学、異文化体験、現地の人々との直接交流の良い機会であるが、漫然と見学したり、体験したりするだけでは「学び」とはならない。研修を単なる見学や体験に終わらせないためには、研修の目的を明確にし、研修参加学生（以下、研修生）が、

主体性をもって、積極的、自律的に参加できるようなプログラムを組むことが必要である。

このプログラムでは、研修の教育的効果を高めるための具体的な方法として、「探求」「発信」「交流」の3つの目標を設定して、プログラムを実施した。研修の主軸は、「交流」であるが、交流活動の中には、「探求」や「発信」を伴う場面があり、これらは密接に関連している。現地では、日本語キャンプ、現地学生による観光案内、日本語授業参加、キャンパスツアー、学生・教員との交流会等を通じて、研修生にとって、どのような異文化に関する「気づき」「発見」「驚き」「疑問」「学び」等があったかを研修レポートを基に考察する。

II 海外研修実施の基本理念

2.1 研修の形態：「探求型」「発信型」「交流型」

海外研修には、目的に応じて幾つかの方法が考えら

れるが、ここでは探求を主軸とした研修（探求型）、発信を主軸とした研修（発信型）、交流を主軸とした研修（交流型）を提案し、それぞれの実施方法を述べる。

まず、探求型では、研修生が探求課題を設定し、渡航先で課題を達成することを目標とする。渡航先について事前学習し、研修期間中に探求したいことを興味・関心に合わせてリストアップする。事前研修会では、探求課題を発表し合い、他の人の探求課題についても知ること、視点、観点を広げる。研修期間、時間・日程等を勘案して、探求計画を立てる。訪問場所、交通手段、時間、面会する人との交信等を含め、可能な課題を複数設定する。何を、どのように、どこまで探求するかを考えて、活動計画を立てる。稲葉（2016）は、探求型の研修の実践例である。

発信型では、研修生が何らかの発信の活動を行うことを目的とする。例えば、訪問先での日本の社会・文化・教育等の紹介のプレゼンテーション、書道、茶道、華道、浴衣試着、楽器、伝統的な遊び等の異文化体験を提供する活動、現地の学生等へのインタビュー、グループ・ディスカッション、意見交換等が挙げられる。稲葉（2015）は、発信型の研修の実践例である。

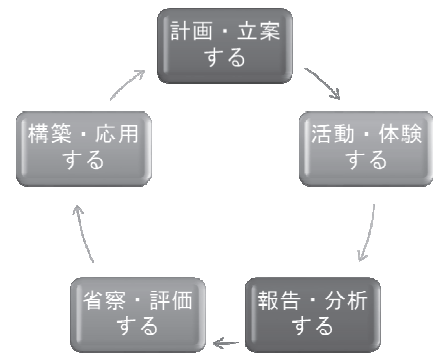
交流型では、研修生が訪問先の教育機関等で現地の学生・教員、地域の人々等と交流を行うことを目的とする。予めどのような活動や交流がしたいかを話し合う。交流には、こちらが日本文化等を紹介する活動、訪問先が計画する行事や交流会への参加、大学の授業見学、現地学生等によるキャンパスツアー、日本語の授業等への協力、合同小旅行等の例が挙げられる。

これらの3形態は主目的により便宜上分類しているが、研修内容は、重ね合わせることが可能である。例えば、「探求型に交流を通して達成される課題を設定する」「交流型に発信型の活動を取り入れる」「発信型に発信が交流の契機となるような発信を取り入れる」等である。さらに、これらの3つの研修の形態は、1つの研修プログラムの中に組み合わせて取り入れると効果的である。本稿で取り上げるタイ海外短期研修は、前半が主にバンコクでの探求型、後半が主に協定校での交流型であるが、これらの3要素を取り入れている。

2.2 学習サイクル

短期海外研修では、研修生が主体的、能動的、自律に取り組むことが大切である。本研修は、以下に述べる学習サイクルの考え方に基づいて実施した。

研修の過程を、1) 計画・立案する、2) 活動・体験する、3) 報告・分析する、4) 省察・評価する、5) 構築・応用する、という5段階で捉える。



【図1】学習サイクル

このような研修のあり方は、学習者の能動的な活動、主体的な学習、積極的な学習への参加等に着眼したアクティブラーニングの理念にも通ずる。そして、5つの段階を繰り返すこと（学習サイクル）が必要であると考えられる。以下に各段階の説明をする。

(1) 計画・立案する

研修を効果的なものにするには、事前学習や準備が大切である。事前学習の段階から、研修生が主体的、能動的、自律的に研修の計画・立案に参画できるようにする。研修全体の目的、渡航先、日程、費用、現地の事情等、研修の内容を把握する。受入側との調整等も行う。

研修で「知りたいこと」「確かめたいこと」「見たいもの」「やってみたいこと」「伝えたいこと」等を明確にし、研修の目標や課題を設定する。目標や課題を達成するための具体的な方法を考える。何をどこまで実行するか（到達点）を明確にする。仮説、想像、推察などを含めると、現地で調べたり・確認するときの焦点が定まる。

(2) 活動・体験する

活動後は、体験を細かく記録する。異文化体験や探求活動を通して、「分かったこと」「発見したこと」「確認したこと」「分からなかったこと」「新たな疑問」等を記録しておく。活動における「達成感」「満足感」「安堵」「自信」「不安」「戸惑い」「葛藤」等の様々な感情についても、どのような時にこれらを感じたか、また、どう自分が対処したか、不安等を克服したか等を書きとめておく。交流では、「感動したこと」「感心したこと」「驚いたこと」「不思議に思ったこと」「うれしかったこと」等、直接人々と触れ合うことで感じたことをまとめておく。その他、五感を通して感じたこと等、体験に関する記録をつける。

(3) 報告・分析する

活動後には、報告会を開く。報告会は他者との関わりの中で自分の体験から得た学びを深化させる機会

ある。学んだこと、感じたこと、疑問に思ったこと等について、他の研修生と共に考える。報告会は活動の直後でも、一日の終わりでもよい。活動と活動の間の空き時間、空港での待ち時間等も利用できる。

活動や体験で得られた知見、情報等を報告し合い、他の研修生と意見交換することで、別の見方や考え方があることに気づき、自分の考えを見直し、再構成することができる。研修中に直面した困難等については、「なぜそうなったのか」「どう対処したか」「他に方法はあったか」「困難な体験で学んだこと」等を協同で分析、考察する。体験から得た教訓は、次にどのような行動をとったらよいかを判断する糧になる。体験は個人的なものであるが、他者と交流することで、より広い視点や客観的な立場から捉え直すことができる。「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という活動に、共同的な学びを導入することで、学習の質を高め、学びを深化できると考える。

(4) 省察・評価する

活動や体験の振り返り（省察）は、何をどう学んだかを確認し、研修の成果を把握する上で重要である。省察では、設定した目標・課題の達成度を評価する。例えば、どの程度達成できたか（到達度）を100%中の割合で出してみる。そして、達成度の判定の理由を明示する。達成度が低かった場合は、その理由や原因を考える。また、活動や体験を通じて学んだこと等をリストアップする。どれだけの気づき、発見、感動、達成感、満足感等があったかも等も研修の成果と考えられる。どれだけ発信できたか、伝えられたか、コミュニケーションができた等も重要である。現地の学生等からの感想やコメントが得られれば、省察はより充実したものになる。省察は、自己を変容（人間性等が豊かになる）させる大切な手段の一つである。

(5) 構築・応用する

研修での学びを構築する。研修で得た知見をさらなる探求や新たな活動につなげていく。交流を継続し、新たな繋がりへ発展させることも含まれる。研修の成果を高等教育機関の教室等での学びに還元したり、逆に、教室等での学びを教室外での活動に応用する。研修や体験活動の効果を高めるには、一連の過程を繰り返していくことが必要である。このようにして、豊かな人間性や社会性、自ら学び考える力等を醸成する。

Ⅲ プログラムの概要

3.1 研修の準備

研修の準備は、研修生主導で行った。現地での計画は、今回の場合、訪問先の大学である程度作成してい

たので、それに沿う形で準備を進めた。役割分担等も行った。準備は、訪問する大学や町について調べることから始め、現地の挨拶の言葉なども学習した。事前に訪問先の学生等に聞きたいこと等をまとめ、届けた。

交流計画が決まったら、研修生の自己紹介ポスター等を届けた。訪問先の方々も研修生に興味を持ってもらい、交流を促進するためである。研修には報告会を実施した。また、研修後は交流活動等を振り返り、成果や課題をレポートにまとめた。

参加者は、学生4人と引率教員1人である。表1は、学年、専門分野、研修レポート抜粋時の識別記号の一覧である。

【表1】研修生のプロフィール

	学年	専門分野	識別記号
1	修士2年	家庭科専攻	AB
2	修士1年	情報教育専攻	CD
3	学部2年	教育科学選修	EF
4	学部2年	教育科学選修	GH

3.2 現地での活動

タイのチェンライ・ラチャパット大学日本語学科で、【表2】のような交流活動を行った。2日間の日本語キャンプ参加、現地学生の案内による近隣の小旅行、日本語授業参加、キャンパスツアー、交流会等である。日本語キャンプには、他の交流団体から日本人の大学生が25名程度参加しており、キャンプを一緒に行った。

【表2】チェンライ・ラチャパット大学での交流活動

日程	主な内容
1	到着／教員との夕食会（伝統料理） タイの音楽喫茶で交流会
2	日本語キャンプ1日目（リゾートにて） ①長縄大会 ②野外ゲーム／伝言ゲーム・カード並べ等 ③夕食作りと夕食会 ④ショーの練習とショータイム ⑤熱気球を上げる ⑥宿舎にて交流
3	日本語キャンプ2日目 ⑦ラジオ体操 朝食 ⑧グループ毎に観光→大学に戻る ⑨夕食会（北タイ料理）
4	小旅行（4年生の案内で） ⑩ワット・ロンクン／首長族の村／昼食 ゴールデンライアングル他 ⑪夕食会（焼き肉） ⑫ナイトバザール
5	キャンパスでの交流 ⑬日本語授業(1)参加

⑬日本語授業(2)参加
⑭昼食会(学生のカフェ)
⑮キャンパスツアー
⑯市場見学等
⑰交流会
⑱夕食(教員と)エビ焼き
⑲土産屋で買物
⑳空港到着 記念撮影等

3.3 研修課題の設定

本研修では、訪問先の大学の情報や現地の事情等を事前学習で調べ、それぞれの研修生が調べたことを発表し、情報を共有した。訪問先では、どのようなことをしたいか、交流で得たいことは何か等を考えた。実際に現地に行ってみないと分からないこともあり、あくまで期待、希望と考えた。【表3】は、研修生が取り上げた交流活動への期待と異文化・日本語教育等への関心の一部である。内容は、現地で直接交流することをめざしたもの(交流)、異文化理解に関わるもの(異文化)、日本文化等の発信に関わるもの(発信)、日本語教育に関わるもの(日本語)等に分類された。訪問先は日本語学科であるが、参加者には、日本語教育を専門、専攻としている者はいないが、日本語教育への関心も高い。

【表3】交流活動への期待と関心

分類	内 容
交 流	タイの学生と日本語で会話してみる。
交 流	日本語キャンプで、タイと日本の食文化について話し合いたい。
交 流	一般的な授業スタイルについてタイの学生に聞きたい。
交 流	タイではどんな教育を受けているのか。
異文化	チェンライの文化や歴史について理解を深めたい。
異文化	タイでの日本のイメージを聞きたい。
異文化	日本人で知っている偉人等はいるか。
異文化	日本文化にどうやって触れているのか。
異文化	大学生の関心はどこに向いているのか。
異文化	日本とタイの大学の相違点を考える。
発 信	日本の良さをタイの学生に伝えたい。
発 信	日本の食について伝えたい。
発 信	積極的に話しかけて、コミュニケーションの能力を高めたい。
日本語	どんな理由で日本語を勉強しているか。
日本語	日本語を勉強している学生は将来どのような職業につくのか。
日本語	日本で使われる日本語と現地で教えられる日本語に違いはあるか。
日本語	日本語の授業の展開の方法を知りたい。

IV 研修レポートの分析

4.1 研修記録と省察レポート

活動後は、体験を細かく記録するように指示した。研修生は、研修記録に異文化体験や探求活動を通して、「分かったこと」「発見したこと」「確認したこと」「分からなかったこと」「新たな疑問」等を記録した。活動における「達成感」「満足感」「安堵」「自信」「不安」「戸惑い」「葛藤」等の様々な感情についても、どのような時にこれらを感じたか、また、どう自分が対処したか、不安等を克服したか等を書きとめた。交流では、「感動したこと」「感心したこと」「驚いたこと」「不思議に思ったこと」「うれしかったこと」等、直接人々と触れ合うことで感じたことをまとめた。その他、五感を通して感じたこと等、体験に関する記録をつけた。

ここでは、研修生がどのようなことを学んだかを研修記録をもとに考察する。研修記録には、その日の主な活動・体験とその感想等が書かれており、発見、気づき、疑問等、研修生が学んだことを直接垣間見ることができる。また、コミュニケーションや交流の様子が生き生きと描かれている。本稿では、これらを研修の教育的効果の一部と考え、以下で研修生の学びをレポートの中に探っていく。

4.2 日本語キャンプ(1日目)

初日の日本語キャンプの活動内容と感想を書いたものである。(4.1)は、最初は緊張があったが、長縄大会で解れ、徐々に交流を深めたことが記されている。

(4.1) 初めての交流だったので緊張していたが、一緒に回数を言うことで一体感が感じられ、多く飛ぶことができて楽しかった。仲良くなる手段は国籍を問わないと感じた。参加するかどうか迷っていたが、学生が声をかけてくれたので遠慮せずに参加することができた。(GH)

(4.2)は、野外ゲームの感想である。ゲームでコミュニケーションが促されたことを述べている。

(4.2) 日本語を勉強している人たちとやったことで、心から楽しめた。とても単純なものであるが、勝つためにたくさんコミュニケーションをとる機会にもなってよかった。(EF)

(4.3)は、タイでの呼び方に関わる発見である。発見については、さらに考えを深めている。

(4.3) どうやらタイ人は年齢や上下関係を気にするようで、まず年齢を聞かれることが多かった。タイ語で年齢を言えるようにしていたおかげ

で気軽に会話をはじめることができた。年齢によって呼び方に変わりが出てくるため、気にするようだ。 (CD)

(4.4)は、洗顔で困った時のおもしろい発見である。

(4.4) ゲームで化粧をさせられたが、どうやって落としたらいいかわからなかったが、タイ人の学生がわさび入りの洗顔フォームを貸してくれた。これが効果テキメンであり、日本に帰って帰りたいと思うほどのものだった。
(CD)

夕方からタイの学生と一緒に夕食作りをした。この日のメニューは、豚丼、タイ風春雨サラダ、グリーンカレー、マンゴー等であった。(4.5)は、その時の感想である。調理器具や調理方法の違い、味の違い、衛生観念の違いに驚いた様子がうかがえる。(4.6)は、衛生面への懸念を表している。

(4.5) 夕食作りでは、日本には見かけないタイの調理器具や調味料がたくさんあり、使い方や料理について情報交換しながら楽しく料理をしました。夕食では食べ方を教わりました。(AB)

(4.6) あまり衛生面はよくないと思った。材料が違ってもまな板や包丁は変えていなかった。またあまり食材をきれいに洗っていない。何より、あまり水がきれいでないので...
(EF)

(4.7)では、日本語の内容が難しくなると、説明に困った様子が記されている。

(4.7) 夕食時は、今まで食べたタイ料理の話をして盛り上がった。しかし、どうしても会話が進むと使う言葉のレベルも上がり、理解できていない様子が見受けられた。こちらタイの文化を理解するまでに至っておらず説明が難しいと感じたことが一番印象に残っている。
(CD)

キャンプでは夜にショータイムがあり、現地学生が歌、劇、踊り等を披露した。日本人学生も当日の夕方からグループに加わって練習し、発表に参加した。(4.8)は、現地学生への感謝の気持ちが表れている。

(4.8) 本番のショーでは、日本語の音楽ファイルに合わせてショーをみんなの前で披露しました。タイ学生と日本人学生の笑い声が絶えませんでした。私たちに披露するためにたくさん練習してくれたと思うと嬉しくなった。
(EF)

研修生の発表の時間も設けられた。(4.9)は、発表の内容である。しかし、(4.10)では、習字の実演であり感動を与えられなかったことが記されている。

(4.9) 習字と少林寺拳法のショーを披露しました。習字では、最初に、一生に一度の貴重な出会いを大切にしたいという思いを伝える意味を込めて、「一期一会」をみんなの前で書きました。また、タイの学生に書いてほしい文字をリクエストし、「大好き」を書き、最後に感謝の意を込めて「ありがとう」を書く所を披露しました。(AB)

(4.10) 書道の反応はいまいちだったが、次に CD が少林寺拳法の型を披露し、気を込めた迫真の型を披露するとは盛り上がってよかった。
(AB)

キャンプでは、研修生たちは現地学生のグループに入ってロッジに宿泊した。その時に、多くの衝撃を受けた様子が記されている。(4.11)～(4.13)では、同じ布団で寝ることへの抵抗感や、衛生観念やシャワーの習慣等の違いを肌で感じたことが記されている。

(4.11) 一番の衝撃的できごとは夜の寝るところである。同じ布団でタイ人と寝るとは考えてもいなかった。それはそれで新鮮で楽しかったが、他の日本人の学生は少し引いていた。
(CD)

(4.12) シャワーがトイレに設置されており、そこを利用することに驚きだった。水シャワーが多く、温水も調節が難しいため、十分な水が出る環境で育っている日本人にとっては慣れるのに時間がかかると思った。(EF)

(4.13) 日本人はシャワーやお風呂でゆっくりすることが主流だが、タイは頻繁にシャワーを浴びて長居しないので、文化の違いを感じた。
(GH)

4.2 現地学生による観光案内 (2日目)

キャンプの2日目は、グループに分かれ、タイ風バスのソンテウに乗ってチェンライ観光へ出かけた。行き先はタイの学生が企画し、グループによって異なる。(4.14)はバスの中での日本語コミュニケーションの様子である。タイの学生の日本語力に感心している。

(4.14) ソンテウの中では、アルバイトの話やタイのことについて話したが、よく日本語でしっかりコミュニケーションが取れるなとただただ感心させられるばかりであった。 (CD)

(4.15)は、学生とのコミュニケーションがうまくいか

ないときのこと書かれている。対応の上手な日本人に感心している。

(4.15) タイ語での会話が始めると戸惑い、日本人同士で会話してしまうこともあった。別の研修生はうまくその場を日本語の会話につなげていたので、私もできたらよかった。 (EF)

(4.16)は、昼食時の残念に思ったことである。同時に疑問も提示している。

(4.16) 本当はカレー麺が食べたかったけど、辛いと言われたので普通の麺にした。食べさせてもらったが、やはり辛い。学生は香辛料を沢山かけていて、なぜあんなに辛い物が食べられるのか不思議で仕方がない。 (GH)

4.3 小旅行 (3 日目)

小旅行では、タイ、ラオス、ミャンマーの 3 か国の国境が隣接しているゴールデントライアングルへ行った。国境地帯については、強烈な印象があったようである。(4.17)では、国境警備が予想を異なったこと等が書かれている。

(4.17) 国境地帯のため、重々しい警備がされていると予想していましたが、そのような雰囲気はあまり感じられませんでした。国境越えをすることはできませんでしたが、目の前に異なる国がある風景がとても不思議な印象でした。(AB)

旅行後には、学生達の労をねぎらって、タイ風の焼き肉夕食会が催された。(4.18)はその異文化体験の感想である。

(4.18) 焼肉と鍋が同時に楽しめる形で、画期的で日本にも取り入れたいと思った。いろんな食材があったが、変な色の貝やどこかわからない部位などがあって食べるのに勇気が必要だった。見た目よりおいしく食べることができた。(GH)

4.4 日本語の授業参加 (4 日目)

4 日目は、日本語の授業に参加しタイと日本について会話活動を行った。テーマはお土産、食べ物、観光地、お化け、行事等で、お互いに日本語で紹介し、質疑応答を行った。(4.19)では、日本語が通じないときにジャスチャーを使ってコミュニケーションしたことが報告されている。異文化コミュニケーションで大切な体験である。

(4.19) 話を交えながらタイと日本の違いや知らなかったことを教わったりしながら、会話を楽しみ

ました。3 年生の学生はとても日本語が上手で、分かりやすい説明でした。解りにくい内容はジェスチャーを交えながら会話しました。 (EF)

(4.20)は、タイにおける日本語教育に関する記述である。なぜ日本語教育が行われているかを考える機会となっている。

(4.20) 日本語が今後の社会で重要になっていること、日本語教育を通して世界がつながる可能性などを実感することができた (EF)

4.4 探求課題・発信に関する報告

ここでは、探求課題についての結果の報告の一部を紹介する。(4.21)では、「日本人で知っている偉人等はいるか」について、以下のように報告している。

(4.21) いろいろ聞いてみたが、あまり詳しくは知らない様子であった。サッカーが好きな学生はサッカー選手の名前を挙げてくれたがそれ以外のジャンルは知らないようであった。どちらかと言えば、アニメや漫画について詳しい子が多く、そちらのことはよく知っていた。(CD)

(4.22)では、「日本の大学とタイの大学の相違点を考える」について、特徴を捉えることができなかったと報告している。さらに、日本の大学についても問題点が絞れてなかったと省察している。

(4.22) 今回のプログラムでは、大学見学の時間と内容が限られていたためあまり一般的なタイの大学の特徴を捉えることができなかった。日本の大学の問題点が十分に挙げられないため、改善点の考察はできなかった。 (GH)

(4.23)では、「タイでの日本のイメージを聞きたい」について、日本語力が不十分で回答が得られなかったことを報告している。

(4.23) 日本はとてもいいところだと言っていた。難しい日本語が分からないため、具体的なことはわからなかったが、食べ物が特に魅力的だと言っていた。特に寿司は人気であった。何のネタを食べているのかと聞いたがあまり答えが返ってこなかった。(EF)

(4.24) は、「どんな理由で日本語を勉強しているか」に関するインタビューの結果報告である。

(4.24) ほとんどの学生が「日本が好きだから」という答えであった。好きな理由としては、「景

色がいい」「アニメが好き」「行ってみたいから」と様々であった。日本語を勉強して何になりたいかと聞いたところ、ツアーガイドや通訳など、日本語を使った仕事をしてみたいと、ぼんやりと将来のことを考えているようだった。しかし、まだ決まっていない学生がほとんどであった。(CD)

(4.25) は、「日本で使われる日本語と現地で教えられる日本語に違いはあるか」に関する探求の報告である。タイの学生と実際に日本語で話してみて、感じたことや発見したことが書かれている。

(4.25) 日本語を学習している学生だったため、きちんと会話することができた。ほとんどの会話は問題がなかったが、疑問文の場合に 1 点問題があった。日本人が話す際に、疑問文の終わりに「～ですか？」など使わず、「～なの？」や「どうしたらいい？」などと表現する。しかし、これはタイの学生には通じなかった。質問する際には、きちんと「～ですか？」と疑問文の決まりの形？を使用すると会話を続けることができた。タイの学生は教科書の文章はきちんと使いこなせるといった印象を受けた。しかし、今の日本の言葉とは違うように感じた。その面から考えると現地の日本語の先生が「変に意識せず、学生と話して欲しい」と言ったことがうなずけた。(CD)

次に研修生が発信したいと考えたことに関する報告を見る。(4.26)では、「日本の良さをタイの学生に伝えたい」という願望に関する感想である。発信できたと同時に、研修生自身が気づいてない日本の良さもあることを発見したという省察が書かれている。

(4.26) 会話活動の時に、日本のことを教えることができた。実際に行った所や食べたものの写真を見せることで、学生さんたちの興味をひくことができたと思う。一中略日本のことについては、よく勉強されていたので、ネットや資料からは読み取れない日本を伝えたいつもりである。しかし、私自身が日本人のため、気づいていない良さもあると思う。実際に学生さんが、日本に行くきっかけになっていれればいい。(EF)

(4.27)では「日本語キャンプで、タイと日本の食文化について話し合いたい」「日本の食について伝えたい」という願望に関する感想である。食べ物について詳しく紹介することができたこと、加えて、若者言葉を教えて親近感が沸いたことが書かれている。

(4.27) 焼酎の原料には米、麦、芋があることを伝え、ところ、タイ学生から興味を示してもらえ、日本の調味料である「味醂」についても少し説明することができ、日本の食文化を目標以上に伝えることができたと思います。さらに、日本の若者言葉を少し伝えることができ、様々な箇所で使ってもらえたことで、親近感が沸きました。(AB)

4.5 全体の省察

最後に、研修全体に関する研修生の省察を紹介する。(4.28)は、現地の学生とコミュニケーションが積極的にとれたこと、その感想を述べている。通じない時のどうやってコミュニケーションをとるかを体験して見つけ出したと思われる。交流を主軸とした本研修では、現地の人とコミュニケーションをとることは大切な目標の1つであった。この省察から、この目標はある程度達成されたと考えられる。

(4.28) たくさんの人たちとコミュニケーションがとることができた。時々わからない単語もあったが、他の言葉に置き換えることで会話がはずんだりした。日本に住んでいると当たり前だと思っていた言葉も、他の国の人からすると分からないこともある。しかし、置き換えをしたり、簡単にすることによってコミュニケーションが取れて、幅も広がることを学んだ。(GH)

(4.29)は、日本語教育に関する記述である。今回はタイの日本語学科を訪問したので、日本語教育に関する知見を得る機会に恵まれた。研修生は海外の日本語教育について初めて触れたが、事前準備を十分にすれば、より深く知ることができたと省察している。研修において準備の大切さを認識したという点では、教育的な効果があったのではないかと考えられる。

(4.29) 今まで学んだことがなかった日本語教育について学ぶことができた。しかし、事前学習も不十分だったため、他の国での日本語教育と比べることができなかったため、もう少し日本語教育について学んでいったほうが、もっと実りあるものになっていたかもしれない。(EF)

(4.30)では、できなくて残念だったこともあるが目標以上の発見等があったことなどが書かれている。研修では、達成された目標・課題もあるが、できなかったことや分からなかったことも多々ある。達成されなかったことはその原因や理由を明らかにすることが成果と考えている。また、新たな目標や課題を提示することも研修の効果と考えている。

(4.30) 自由交流で鶴の折り方以外に他の折り方を伝

えることができなかったことが少し残念でしたが、今回の研修で事前に立てた目標をほとんど達成できたのと同時に目標以上の発見や情報を得ることができたことは、大きな財産となりました。 (AB)

(4.31)は、タイの学生等への感謝の気持ち、準備不足であったという反省、そして、今後の抱負を述べている。特に「今度は、ぜひタイ語で交流してみたい」という願望は、研修後に現れたもので、外国語コミュニケーションに関する興味や関心を高めたという点で、成果の1つを捉えられる。

(4.31) 彼らがここまで準備をしてくれていると思っていた私には、少し準備不足であったと思う。もう少し、チェンライについて勉強しておけば、もっと会話がスムーズになっただろう。次回行く機会がある時は、今回仲良くなった友人たちに質問し、知識を貯めて、タイを満喫したいと思う。今度は、ぜひタイ語で交流してみたい。 (CD)

V 成果と課題

本稿では、交流を主軸とした海外短期研修を通じて研修生がこのどのようなことを学んだかを研修記録や省察レポートの記述を基に探った。その結果、以下のようなことが示唆された。

交流の目標の1つである現地でのコミュニケーションについては、積極的に多くの人と話す機会を得た。うまく通じなくても簡単な言葉での置き換えやジェスチャー等で工夫すれば、コミュニケーションをとれることを学んだ。難しい話題で通じず、会話が途切れたり、返答が得られないことも体験した。これらは異文化コミュニケーションとして大切な体験である。

交流については、最初は不安、戸惑いを感じながらも交流の輪に溶け込んで親睦を深め、感動や喜びを得ることができた。異文化体験では、研修中の多くの活動の中で様々な発見や驚き等があった。同時に文化の違いや疑問も感じることもできた。

課題の探求を通じて、文化や習慣等に関して様々な情報や知識を得た。分からなかったこともあるが、新たな疑問も提示した。日本文化や日本語等について積極的に紹介した。日本について伝えたいという気持ちから発信しており、できたときは達成感、満足感等を得たと思われる。

研修後、目標が達成されたかどうかを確認し、達成できなかった課題については、その原因や理由を考えた。準備不足だった点を反省し、今後の研修に関する新たな姿勢も見られた。新たな目標や課題も提示でき

た。これらは、全て研修の成果であると考えている。

この海外短期研修全体の前半部分であるバンコクでの探求を主軸とした研修では、コミュニケーションをする機会が少なかったことが課題となっていた。しかし、後半の交流を主軸とした研修でその部分が補えたのではないかと考えられる。

しかし、この1回だけの研修でできる体験は限られている。研修での学びを構築していくためには、さらなる交流や体験や研修が必要である。探求型、発信型、交流型の研修を組み合わせ、今後もさらに研修の機会を設けていく必要があると考えられる。

謝 辞

本研修は2015年度海外短期派遣プログラムとして愛知教育大学より助成を受けました。プログラムの実施にあたってご支援いただいた学長、国際交流センター長、及び、事務関係者の方々、及び、訪問先のタイ王国チェンライ・ラチャパット大学の教員の方々に感謝の意を表します。

参考文献

- 稲葉みどり (2015). 「米国短期研修プログラムの教育的効果の考察ー現地での活動の省察レポートの分析を通じてー」『教養と教育』15, 7-16.
- 稲葉みどり (2016). 「アクティブラーニングを取り入れた海外短期研修の省察」『教養と教育』16, 13-21.